

出会い、ふれあい、心の輪



〈完全参加と平等〉

令和2年度入賞作品集

心の輪を広げる体験作文
障害者週間のポスター

令和2年11月

富 山 県

目次

心こころの輪りんを広ひろげる体験たいけん作文ぶん入賞いしょう作品

最優秀賞

小学生の部

知ること、それが第一歩

富山市立堀川小学校 六年

吉越帆高
…………… 1

中学生の部

障害という個性を越えて

氷見市立北部中学校 一年

山田美希
…………… 3

高校生の部

違いなんてない

富山県立南砺福野高等学校 一年

松井彩吹
…………… 5

優秀賞

小学生の部

ヘルプマークってなんだろう
ボランティアかつどうにて

富山市立草島小学校 二年
氷見市立窪小学校 二年

東原 海崎
あ 優 芽
い 芽
………
………
8 7

中学生の部

私を変えてくれた障害者へ
明るく温かい社会へ

高岡市立戸出中学校 二年
高岡市立戸出中学校 二年

林園 田
絢涼 香香
………
………
11 9

高校生の部

本当に必要としているもの
偏見をなくすためにできること

富山県立南砺福野高等学校 三年
富山県立南砺福野高等学校 三年

法織 田
怜一 加
奈加
………
………
15 13

障害者週間のポスター入賞作品

最優秀賞

中学生の部

覚えようつながろう

射水市立小杉中学校 二年

荒木愉陽

17

優秀賞

小学生の部

ヘルプマークを知ってもらおう

富山市立草島小学校 二年

原崎優芽

18

中学生の部

障害者でも輝けるステージを

射水市立小杉南中学校 二年

肥田蒼輝

安心して暮らせる社会へ

射水市立小杉南中学校 二年

佐野翠咲

参考資料

令和二年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」募集実施要領

..... 19

令和二年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」応募状況

..... 22

令和二年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」審査会審査員名簿

..... 23

本作品集に掲載する作文は、明確な誤字等以外は原文のまま掲載しています。

「知ること、それが第一歩」

富山市立堀川小学校 六年

吉越帆高

「ごめんねはいらないよ。ありがとうだけでいいよ。」

これは、宿泊学習で急な坂道を登る時、後ろから押してくれた友達がかけてくれた言葉です。ぼくは生まれつき足にまひがあつて歩行器や車椅子を使って生活しています。友達に助けてもらうことも多く、ぼくはいつも、「ごめんね。」と言っていました。でも、このときの言葉で、仲間として認めてもらえていることを実感して、この仲間と出会えて良かったと思つたことを今でも覚えています。

小学校に入学した時、それまでは療育センターに通つていて障害のある子としか過ごしたことがありませんでした。ぼくは支援級なのですが、交流級にも行くことになり、初めて行く時はみんなの迷惑にならないかと、一緒に過ごしているかなど、とても心配で不安でした。けれど、すぐにみんな話しかけてくれ、とてもほつとしました。しかし、いやなこともありました。それは、周りのみんなに「どうして歩行

器を使っているの。」と、ひんぱんに聞かれたことです。当時はどうやって答えればいいのか分からず、泣いてしまつたり黙つてしまつたりしました。でも、勇気を出して答えているうちに、聞いてくれた子が周りの子に教えてくれたり、「街中で車いすとか使っている人を見てもおかしく思わないようになったよ。」と言ってくれたりして、みんな、ぼくを理解してくれようとしていた証だつたのだと分かつて、いやな気持ちもなくなり、自分から笑顔で説明できるようになりました。

みんなの気持ちがわかつて、学校でもいろんな行事に積極的に参加できるようになりました。運動会も、ぼくが団にいたら徒競走などのポイントを落としてしまうのに、誰もいやな顔をせず走り終わるまで「がんばれー。」と一生けん命応援してくれて、全力で走り抜けることができました。宿泊学習にも参加して、みんなの助けもあつて、できる範囲でみんな

と一緒に活動することができています。

ぼくは今年生です。中学生からの自立ということもあり交流級に行く機会が増えました。それに伴ってみんなに助けをもらう事がますます増えています。だからぼくは「ごめんね。」ではなく、「ありがとう。」を精一杯言うようにしています。そして、ぼくもみんなのために、誰かが困っていたら声をかけてあげたりなど、自分に出来ることを積極的にがんばっています。

時々、ニュースで障害者を差別するような事件を聞くことがあります。ぼくはとても悲しい気持ちになります。ぼくは障害という言葉があまり好きではありません。障害の壁をなくそうと言っているのに言葉で区別ばかりしてはいけません。その壁はなくならないと思います。ぼくが小学校で学んだことは、自分のことを知ってもらうことが大切だということ。みんながぼくのことを知ってくれたから、今とても楽しく学校に通っています。だから、障害のある人は、積極的に自分のことを知ってもらうようにした方がいいし、そうじゃない人は周りの障害のある人のことを積極的に知るようになって欲しいです。もし周りにいなくても本や新聞記事などを読んで読んで関心や興味を持ってもらえれば、先入観や偏見などではなく本当のことがわかると思います。そうすれば、ぼ

くと学校のみんなのように、仲間になれると思います。これは障害のことだけではなく、肌の色や性別なども同じだと思います。そういうことに関係なくその人自身をお互い知るようにすれば、みんなが世界の一員として幸せになれると思います。だからぼくも、これからも積極的に自分のことを知ってもらい、また自分も周りの人のことを知るようになっていきたいです。それが、第一歩になるからです。

「障害という個性を越えて」

氷見市立北部中学校 一年

山田美希
やま だ みつ き

「どうして神様は障害というものを与えたのだろう。」

ふと心の片隅で言ってしまう。この世界では、生まれつき障害をもった人がたくさんいることを初めて知りました。発達障害や聴覚障害など、私の知らない障害はたくさんあることを本で見つけました。この作文を読んでくださる方もこんな体感はないですか？例えば、いつも歩いている道には黄色いでこぼこしたタイルが並べてあったり、大きなショッピングモールの他目的トイレのウォシュレットにはつぶつぶとした点があるのを見たことはありませんか？実はこれらは全て、障害を持った人が快適に過ごすためにつくられたものなのです。私はどうして、このような物があるのか、どうしたらもっと障害を持った人々が快適にすごすことができるのか、私が思う理想の未来についての思いをこの作文で伝えていけたら良いと思います。

「どうしたらもっと快適に障害をもった人達が暮らすこと

ができるだろうか。」改めて考えてみると難しい事です。今の時代はどこにでもバリアフリーで聴覚障害や視覚障害に適した完備が整っています。私達の知らない所で技術は進化しています。しかしもっともっと居心地の良い世界を自分達の手で創るためにどうすれば良いか。そんな私にある言葉が入ってきました。

「車椅子で、一番嫌だったのは、周りの視線ですね。」

その瞬間、私は理解しました。どんなに良い製品をつくっても、一人一人が互いを理解し尊重しないとなんの意味もないということにどうして気付かなかったのでしょうか。こたえは簡単、私自身が一人一人を理解しようとしていなかったからです。クラスの中でも、「私とあの子は合わない。」という理由で自ら距離を置いたり、陰口をその人のいない所でたいてはいないでしょうか。このクラスをよくある光景が、人種差別や、障害を持った人を非難するきっかけをつくって

るのだと私は考えます。私がもし障害をもっていたら、「私だ
って好きで障害をもっているわけじゃない。」と心の中で叫ん
でいると思います。例えば、ダウン症という障害をあなたが
持っていて、町中を歩いていて、

「あの子障害者だ。かわいそう。」

って言われたらどうします。きっと私だったら偏見に嫌気が
さし、部屋にとじこもったり最悪死を選ぶかもしれません。
こんな環境を私達が創っているのです。またある日突然、交
通事故で、足やうで、目を失ったらどうしますか。障害はあ
る日突然、私達の身に襲いかかるのです。「私は障害者じゃな
いし。」そう言っていると、それは立派な人種差別になってい
ます。同じ人間・日本人なのにどうしてこんなに、人は人を
馬鹿にしないと気が済まないのでしょうか。そんな障害を持
っている人にどうして偏見の目を世間は向けているのでしょ
うか。

最後に、「神様はどうして障害というものを与えたのだろう」
という疑問に私は、神様はきつとその人にたくましく生きて
ほしいのだと思います。私は過去に補聴器をつけていた女の
子と出会いました。女の子はにこにこことくたくなく笑い接
してくれました。私は障害とは、悪いものではないと思いま
す。「障害」はその人の個性だと思います。なぜこう思うかと

いうと、障害はその人にとって大きな壁を壊すための武器で
もあり、この先どんなに辛いことがあっても乗り越えられる
からです。私達は「障害」という言葉にとらわれすぎだと思
います。障害など気にせず、みんなが社会に貢献するのが、
「心の輪」を広げる大きなきっかけだと思います。この世界
が「障害者」という偏見の言葉がなくなればいい、これが私
の思いであり、一つの願望でもあります。

富山県立南砺福野高等学校 一年

「違いなんでない」

まつい いぶき
松井彩吹

中学生の夏休み。祖母と買い物に出かけたときだった。前日に練習試合があり疲れが溜っていたので、私は祖母に近くにあるイスのところで待っていると聞いた。

「ねえねえそこのお嬢ちゃん。目が突然見えなくなったらどうする？」

と、突然隣に座っていた七十代くらいのおばあさんに話しかけられた。急に話しかけられた驚きと、問いかけられた問題の重みの驚きとで頭の中が混乱した。私はすぐに言葉を返すことができなかった。おばあさんはそんな私をおかまいないでまた私に問いかけた。

「障害のある人に偏見はあるかい？障害があることは悪いことなのかい？」

と。おばあさんの声は少し震えていて、どこか悲しそうだった。

「私は、障害に偏見もないし悪いことでもないと思います。」

だって誰も障害を持ちたくて持っているわけじゃないじゃないですか。でも、目が突然見えなくなったら障害者になったのかとショックを受けると思います。」

そうおばあさんに言った。自分が言っていることは、矛盾しているとわかっている。偏見がないと言っておきながら、障害者になってしまったらショックだ、健常者ではなく障害者のくくりに入れられるのが嫌だと。おばあさんは、私の手をにぎりたかったのか、私に手を出してと言ってきた。私はそんなの目で見てにぎればいいじゃんと思いき、おばあさんの方に目を向けた。すると、

「ごめんねお嬢ちゃん。私失明しとるんやちゃ。なにも見えないし、光もわからん。」

私はとても驚いた。最初に話しかけられたときと違う驚き。おばあさんは目が見えていない。全く気づかなかった。おばあさんはずっと優しい笑顔を浮かべていたし、目元のシワが

多く目がよく見えなかったからだ。おばあさんは、手をにぎる力を強め、目が見えなくなった経緯を教えてくれた。おばあさんは、中学生の頃に目の病気を患い高校生のときに両目を失明したらしい。目が見えないことが原因で思い通りに生活できないし、いやがらせをたくさんされ、最悪の選択をしようとしたこともあると。私は、おばあさんが目が見えないというだけなのに、いやがらせを受ける理由がわからなかった。何も悪いことをしていないし、障害を持ちたくて持ったわけでもないのに。社会から拒否される存在になるのか、必要な存在扱いはされるのか。なぜ、みんなそうするのか、どう考えてもわからなかった。私の肩にそつとおばあさんは手をのせてきて、静かに言った。

「障害者は、どんくさい。何もできない。社会にいと、邪魔なだけ。普通の人と違う、ヘンな人だ。そういう固定概念がずっとあるからね。障害っていうからね。害っていうイメージが抜けないんだよ。」

私は、すごく悲しくなった。障害者にも心があるのに。目が見えなくても、耳は聞こえるし、話すことだってできる。耳が聞こえなくても、目は見えるし、手話や筆談でコミュニケーションをとることもできる。体を動かすこともできる。

体が不自由な人でもできることは必ずある。そう考えると健

常者と全然変わらないと思う。おばあさんは、ゴソゴソと荷物を整理し、私の方を向いて言った。

「お嬢ちゃんと話せて良かったわ。ありがとう。障害者と健常者との差が縮まる日が来るのは、まだまだだね。私たちには、人の力が必要な。健常者だって一緒なんや。小さな気づかいでいいから障害者に優しく接してあげて。その気づかいに救われるんや。」

そう言い残して杖をついて歩いて行った。おばあさんと話して、障害ということを初めて深く考えた。いろんな気づきがあった。障害者も健常者もどちらも変わらない。人の力がないと生きていけない。障害者は、自分でできることが少し少ないだけ。心もある。コミュニケーションもとれるから、思いを伝えることができる。みんなちゃんと向き合っていないだけ。固定概念があるだけ。だから、少しでも障害のある人となない人の距離を近づけられるように、自分ができるとことをしたい。

富山市立草島小学校 二年

「ヘルプマークってなんだろう」

原崎優芽

わたしは、七月十二日に、わたしと妹とおとうと、ママ、パパと、ひみのいきいき元気かんという体いくかんに行きました。そこに、ヘルプマークをつけた男の子が二人いました。わたしは、ママに、

「ヘルプマークをつけた人がいる。」

と言いました。そうしたら、ママは、

「ヘルプマークってなに？」

と言いました。わたしは、ママに、

「足や手やところがしてる人だよ。」

と教えました。わたしは、なぜ知っているかというところ、おばあちゃんと、テレビのコマーシャルで見たからです。わたしは、それを見たとき、

「もしどこかで、ヘルプマークをつけた人がいたら、たすけたい！」

とところで思いました。体いくかんで、男の子二人は、ずっと

とおとうさんとおかあさんのよこにいました。男の子二人は、たのしそうにあそんでいました。わたしは、見ていただけになにもできませんでした。つきからは、こえをかけたり、こまっていたら、

「わからないことはなに？」

と聞いて、教えてあげたいです。

ここでヘルプマークの形を教えます。赤いたてながの四か形で、白いハートとかん字の十のような形が書いてあります。知らない人は、ぜひかぞくといっしょにしらべてみてください。そしてヘルプマークをつけた人を見かけたら、やさしくしてあげたり、分からないことを教えてあげてください。わたしもそうしたいです。

「ボランティアかつどつにて」

氷見市立窪小学校 二年

とう かい
東 海 あ い

わたしは、おかあさんのしごとばのろう人ホームいちえに、おばあちゃんといっしょにボランティアにいきました。そこには、車イスにのった人や、つえをついた人がたくさんいました。耳がとおくて、なかなかわたしのこえが聞こえない人もいました。おかあさんに、

「ゆつくりと大きなこえで話かけてあげてね。」

と、言われました。わたしは、ろう人ホームのおばあちゃんに元気よくじこしようかいをしました。

「わたしの名前は、とう海あいです。こんど二年生になります。」

と、いいました。すると

「大きくなったね。」

と、わたしの手をにぎってなみだをながしていました。わたしは、なんでないているのかわかりませんでした。そのことをおかあさんに聞いてみると、

「それは、きつとうれしいからだよ。」
と、言われました。わたしがボランティアに行くことで、こんなによるこんでくれるとは思わなかったです。

今は、コロナウイルスのせいでおかあさんのしごとばへのボランティアがじしゅくきかんになり、あそびにいけなくなりました。早くコロナウイルスがおさまっておじいちゃんや、おばあちゃんに会って元気をあげたいです。とくに、ダンスや、うたをがんばりたいです。そのためには、マスクをして、手あらい、うがいをしてコロナウイルスにならないようにします。

高岡市立戸出中学校 二年

「私を変えてくれた障害者へ」

その
だ
すず
か
園
田
涼
香

私の家の近所に、発達障害の人が住んでいます。見かけるときはいつも同じ服を着ていて、自転車に乗っています。それ以外はその方が何をしているのか、名前はなんというのか、何も知りません。

私が初めてその人を見たのは小学生のときで、第一印象は「怖い」「気持ち悪い」でした。私はなるべく軽べつや差別をしないようにはしているのですが、誰もいないところに向かってしゃべっている姿や一人でぶつぶつぶやいているのを見て怖いと思ったし、急に話しかけられて、思わず苦笑いをして走ってその場を去ってしまいました。私は今でもその時のことを後悔しています。なぜかというところ、その人は決してただの「変な人」ではなかったからです。ある日、私が一人で下校しているときに、その人に「いい天気やね。」と声をかけられました。一瞬驚きましたが、私は勇気をだして「そうですね。」と精一杯の笑顔で答えました。その後いくつかの言葉

を交わし、最後に彼は嬉しそうに「じゃあまたね」と言ってお帰っていきました。少しだけ話してみても、わかったことがありません。それは、彼はとても強い人だということです。学校で彼の話をしたとき、友達が「かわいそう」と言っていて、私もそのときは同じ気持ちでした。でも本当にかわいそうなのは、障害者に向き合おうとしない私たちの方でした。彼は一度無視した私に、もう一度話しかけてくれました。何度でも、向き合おうとしてくれました。私は彼の前向きな姿、力強い生き方に胸を打たれました。

ですが後日、また後悔する出来事が起こりました。彼と話すようになって一か月が経った頃、学習発表会がありました。私が友達と校内を歩いていると、玄関の方に見慣れた人が立っていました。私も彼も互いの存在にすぐ気づきましたが、話しかけることができませんでした。それは友達が「なんかキモい人おる、あっち行こう。」と言ったからです。私がすぐ

に「キモくない」と否定すればよかったのに、私にはそれができませんでした。その後はずっとモヤモヤしたまま一日を過ごしました。あのときすぐに彼に話しかけていたならば、友達は私を軽べつしたでしょうか。周りの人達は冷たい視線を向けてきたでしょうか。もしそうなっていたとしても、私は全然嫌だと思わなかったはずです。むしろ、もっと彼のよさを伝えたいと思ったでしょう。この時私は彼と出会う前と考え方が変わっていることに気がつきました。常に自分の事だけを考えていた自分が人のために考えられるようになったのです。今まで彼と一緒にいる所を見られたくないと思っていたけどこの出来事をきっかけに、私の障害者に対する考え方は少しずつ変わっていきました。

障害のある人となし人との間には見えない壁があると思っていました。でも、その壁を私たち健常者が無意識につくってしまっているだけで、健常者が障害者への考え方を少し変えることで今まで知らなかった世界を知ることができたり、自分を変えることができます。

これからの人生の中で私はまた障害者の方に出会うかもしれません。その時は、彼が何度も向き合ってくれたように私もあきらめず何度でも向き合う努力をします。彼が私にくれたこの勇気を、誰かに分けてあげたいと思いました。

高岡市立戸出中学校 二年

「明るく温かい社会へ」

はやし

あや

か

林 絢 香

私は、小学校のときダンスを習っていました。これは、ダンスの発表で行った障害者しせつでのお話です。

私は、そのしせつに行ったとき、正直おどろきました。なぜなら障害者の方が暴れていたり、大きな声を出したりしていたからです。本当に私たちのダンス見てくれるのかなと不安でした。そして、とうとう発表する時がきました。私たちが発表するときは、みんな静かにこつちを見てくれていました。発表がおわったときに、ある一人の障害者の方が必死で「ありがとう」と伝えてくれました。その瞬間、不安だった心は、どんどん温かくなっていく気がしました。私たちのダンスを見て元気になってくれたんだ、そう感じました。私は正直、この出来事があるまで障害者の方に対して「可哀想」「私が障害者じゃなくてよかった」などと最低な偏見や思いをもっていました。しかし、そんな偏見や思いをもつことは、一生けん命生きている人に対して失礼なんだと気づかされま

した。この発表を通して、そのことが分かりました。

また、その障害者のしせつには私の知り合いの男の子がいます。その子は、「ダウン症」という障害を持っています。その子は、いつも優しく私に接してくれます。私とその子が出会ったのは保育園のときです。私のいとこの友達であったことをきっかけに関わりをもちました。その子はよく、チューリップの歌を楽しそうに歌っていました。私とは少し違うこと、それは幼いながらに分かっていました。でも私は、その子の楽しそうな姿が好きです。今も関わりをもっていますが、今もその子は楽しそうにしていたり、一生けん命に物事をしようとしていたり、その子を見てみると気持ちが温かくなります。私は、その子に出会えてよかったなと思っています。

そしてもう一つ気持ちが温かくなったことがあります。それは、その子のお母さんの話です。その子のお母さんは、いつもその子に付きっきりです。大変そうな時もあります。で

も笑っているときが多いです。私は、その子のお母さんが笑っているときに、障害者の母も障害者の方も前向きに毎日過ごしているんだなと思いました。そんな姿を見ると私は心が温かくなりました。

障害者の方も前向きに毎日を過ごしています。そんな方々に対して偏見をもたないことそれがよりよい社会をつくるために大切な事だと思います。たくさん温かい場面を見てきて、私も生命力をもらいました。これからも、お互いを理解し合い、明るく温かい社会をつくっていききたいです。

富山県立南砺福野高等学校 三年

「本当に必要としていくもの」

織田一加
おだいちか

「身体が不自由な人の世話をして楽しいと思う?」「先に望みのある人の役に立ったほうがやりがいを感じない?」私が介護福祉士を目指した時、周りの人から言われた言葉です。確かに私自身も不自由があつて困っている人のお世話をしなければいけないと思つていましたが、お世話をしてあげる

ことそがやりがいだから頑張ろうと思つていました。しかし、福祉の学習を通して、それらの考えは間違つていて、高齢者の方や障がいのある方の支え方自体思つていたものとは違うことに気づきました。

私が介護実習に行かせていただく際、初めは「してあげる」という意識が強く、困っている方がおられないか見て、困っていたらしてあげようと思つていました。それが利用者の方には助かること、良いことだと思つていました。私が「私がしましょうか?」としてあげた時には「ありがとう」という言葉が返つてきて、私はそれを嬉しく思つていました。しか

し、そんな中でふと気づいたのは、してあげようとした時の「私はできるよ」という利用者の方の声や表情、洗濯物たたみなどができた時の達成感に満ちた利用者の方の表情でした。職員の方と利用者の方との関わりを見ると、どんな時でも時間がかかっても利用者の方自身が自分でできるように手助けをしたり、見守ったり、「これをしていただけますか?」としてもらつていたりしていることに気がつきました。そしてその時の利用者の方の様子は、私が何かをしてあげた時と比べるととても生き生きして見えました。そこで私はもしかしたら私が何でもしてあげることが、ただ自分が一方的に達成感を感じて満足しているだけで、相手のできることや生きる活力までも奪つてしまつていて、むしろ相手のためにしたことが良くなかったのではないかと感じました。そうだとしたら、障がいのある方など少なからず日常生活に支障をきたしている方に対して、何をしてあげるのが正解なのか、初めはわか

りませんでした。そんな中ある職員の方に言われたのが、「関わり方に正解なんてないから、その方のできることを見つけて、それができるようにどんなお手伝いができるか考えたらいいんだよ」という言葉でした。利用者の方との関わりの中のできることを知り、そのことができることがご自身の力でできるよう、手助けをすることが大切なのだということができ、「してあげる」から「手伝う、手助けをする」という視点が変わることができました。

介護実習での体験を通して、今まで周りの人や介護実習に行かせていただく前の自分は少なからず、障害を欠点として見ているから、できないからやってあげなければいけないと考えてしまっていたと思います。そのような認識があったから、私の周りの人のように、してあげないといけないから大変だという考えになってしまうことも出てくるのだと思います。私たちのような健常者の方が障がいのある方よりも人数が多いからこそ、障害のある人が特別に見えてしまつて、どうしても、「してあげる」という意識が自然に出ていたのだと感じました。介護実習の中で出会ったある利用者の方に言われた「私みたいに障がいがある人なんて嫌でしょ、なんでもしてもらつて…」という言葉から、なにかしら疎外感を感じておられる方も少なくないのではないかと思います。みんな

それぞれなのに障がいのある方を特別扱いをして接してしまっていることこそが、その疎外感を生んでいると思います。私がしてあげて達成感を感じたように、自分で何かをすることは達成感や生きる活力につながると思っています。そのため、障がいがあるから「してあげる」のではなく、「手伝う、手助けする」ということが大切だと思います。

今社会では少しづつ障がいのある方への理解が進んでいますが、まだ偏見があったり、差別によって障がいのある方が過ごしにくかったりしていると思います。その中でよかれと思つてしていることが逆に疎外感を感じさせてしまうこともあり、障がいのある人もない人も過ごしややすい社会にはまだ程遠いと感じます。私自身まだまだ障がいのある方に対して理解しきれてない部分が多いと思いますが、相手の立場に立つて考え、その方ができることをご自身でできるような手助けをしていきたいです。また、少しでも差別や偏見が減り、障がいのある人となない人との間の壁がなくなるよう、自分の周りの人にも今までの体験、これからの体験からの学びを伝えていきたいと思えます。

富山県立南砺福野高等学校 三年

「偏見をなくすためにできること」

法 邑 怜 奈
ほ う む ら れ い な

「怖い」これは障害のある方を見て思ったことだ。

私は福祉の学科で学び三年目だ。そのため高校に入ってから障害のある方と関わる機会が多くなり、子供から大人まで幅広い世代の障害のある方と関わってきた。生活の中で会うこともあるが、多くは実習やボランティア活動で関わった。障害のある方と初めて関わったのは実習だ。これまでの実習はデイサービスやグループホームなどの高齢者との関わりが中心だった。そのため施設に入所される方は高齢者の方が多いと思いついでいた。しかし、施設に入ると若い方が多くて驚いた。先天性の方もおられれば事故などの後天性の方もおられた。元気で力もあり、手を振り回したり叫んだりする人を見て怖かった。また手や足の動きがぎこちない方もおられ自分の想像を遥かに超えていた。気づくと私は黙ってその場に立ち尽くしていた。職員の方からお話ししてみられと言われ手を振り回す方とコミュニケーションをとった。距離感を

間違えると手が顔に当たったり叩かれたりした。また、言葉が上手く伝えられず「あー、あー」と話す方もおられるため理解できずパニックになり会話が成り立たず沈黙が続くこともあった。他にも交通事故で動きにくくなったなど聞くとう反応すればよいのか分からなくなった。私はたぶんすごく怖いや不安という感情が顔に現れていたと思う。そんな思いで過ごした。しかし、後から思うと私の表情に気付いているはずなのにどの方も笑顔で話してくれたことに気付いた。手ばかりに注目していたため表情や声のトーンなどに気づいていなかった。お昼の時間になった。昼食の介助の見学を行った。鏡を見て食べる人やワンプレートにして食べる人など変わった食べ方が多かった。きつと障害があるから変な食べ方だと勝手に思っていた。その時、職員の方にどうしてあのような食べ方か疑問に思わない？直接聞いてみられと声をかけられた。ドキッとした。障害を持っているから普通に食

べられないと考えてた自分を見透かされたような気がした。心に苦いものが広がった気がした。障害のある方と私は違う。気づかないうちに私は区別していた。私は職員の方に言われる通りどうしてそのような食べ方をするのか聞いてみた。鏡を見る人は口にこぼさずにスプーンを運ぶことができるからだと教えてくださった。ワンプレートの方もたくさん器があると食べられないと自分に合う方法を見つけ食べていると教えてくださった。どの方も理由があった。変な食べ方をしていけるのではなく、自立して食べられるように工夫をしていたのだ。次に習字の時間が始まった。きつと筆を振り回したり、墨で周りを汚すのではないかと考えていた。しかし、前回の習字の先生に教えてもらったことを意識して書く人や何度も繰り返し練習し上達しようとする人、みんな真剣に楽しそうに取り組んでいた。それを見て私はお昼と同じで偏見を持って関わっていることに気づいた。会話が難しいから、身体が不自由だから、〇〇だからと勝手に決めつけていた。つまり、私は障害について知ったつもりになっていたのだ。知るほど、関わるほど、私たちとそれほど変わらないのではないかと思いはじめた。私たちも出来ないことがあると工夫を繰り返している。同じことをしているのだ。

私は実習で学んだことを活かしたり、障害のある人をさら

に知るためにボランティアに積極的に参加した。今年は新型コロナウイルスのためボランティアに参加できていないが普段の生活や募金活動で少しでも関わられたらと思いい活動している。

この経験から始めは障害のある人は怖いと思っていた。しかし、違った。私たちが障害のことについて知らなかっただけだった。偏見だけが進んでいたのだ。多くの人が正しい知識を理解することで大きく変わると感じた。そのために自分が障害のある人と実際に関わることが一番の近道だと思った。障害のある人との関わりは少ないと感じる人も多いと思う。だが、気づかないだけで近くにある。私が行った募金活動もその一つだ。他にも障害のある人が作った商品を買うことや、車いすマークの駐車場に止めないこともだ。私はこのように直接関わらなくても、小さいことでもいいからどこかで関わってほしいと思う。小さなことでもいいからどこかで関わりたい。関わることで障害のある人に対する気持ちが変わり、心が優しくなるはずだから。

障害者週間のポスター

○最優秀賞

【中学生の部】



「覚えようつながろう」

射水市立小杉中学校 二年

あらかきゆなか
荒木 愉 陽

○優秀賞

【小学生の部】



「ヘルプマークを知ってもらおう」

富山市立草島小学校 二年

はら さき ゆ め
原 崎 優 芽

【中学生の部】



「安心して暮らせる社会へ」

射水市立小杉南中学校 二年

さ の み さき
佐 野 翠 咲



「障害者でも輝けるステージを」

射水市立小杉南中学校 二年

こ え だ そう き
肥 田 蒼 輝

令和二年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」募集実施要領

1. 趣旨

障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会を目指し、障害者に対する国民の理解の促進を図るため、「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」を募集するもの。

2. 主催

内閣府、富山県

3. 主管

富山県身体障害者団体協議会

4. 後援

富山県教育委員会、社会福祉法人富山県社会福祉協議会

5. 募集テーマ

- (1) 心の輪を広げる体験作文
出会い、ふれあい、心の輪——障害のある人となない人との心のふれあい体験を広げよう——
- (2) 障害者週間のポスター
障害の有無にかかわらず誰もが能力を発揮して安全に安心して生活できる社会の実現

6. 応募資格

- (1) 心の輪を広げる体験作文
小学生、中学生、高校生及び一般（特別支援学校の小学部、中学部及び高等部の児童生徒を含む。）
- (2) 障害者週間のポスター
小学生及び中学生（特別支援学校の小学部及び中学部の児童生徒を含む。）

7. 募集の方法

- (1) 心の輪を広げる体験作文
① 作文の題名（タイトル）及び内容

作文の題名(タイトル)は自由とし、内容は、障害のある人となない人との心のふれあいの体験をつづったものとする。
なお、応募は、未発表のもの一編に限る。

② 募集の区分

小学生区分、中学生区分、高校生区分及び一般区分の四区分とする。

③ 制限字数、用紙の様式、作成方法等

ア. 一編あたりの制限字数は、小学生区分及び中学生区分については、四〇〇字詰め原稿用紙二〜四枚程度とし、高校生区分及び一般区分については、四〇〇字詰め原稿用紙四〜六枚程度とする。

イ. 用紙は、原則として四〇〇字詰め原稿用紙(B4判又はA4判。縦書き)を使用する。

ウ. パソコン等の電子機器による作成も可とする。この場合、用紙はイ. に準じるものとする。

エ. 第三者が知的財産権を保有する著作物を使用しないこと。

④ 応募者の属性等に関する資料(属性表)

作者の属性表(指定様式)の項目に従い、氏名、住所、年齢(生年月日)、性別、所属先(学校名・学年又は職業)、電話番号、FAX番号、障害の有無・程度、作品の題名(タイトル)及びその他参考となる事項等を記載し、作品と共に提出する。

⑤ 応募先

富山県身体障害者団体協議会

〒九三〇〇〇九四 富山市安住町五二二 TEL〇七六四四四一〇二二三

⑥ 募集期間

令和二年七月一日(水)から九月一日(火)までとする(当日消印有効)。

(2) 障害者週間のポスター

① 作品の題名(タイトル)及び内容

作品の題名(タイトル)は自由とし、内容は、障害者に対する理解の促進等に資するものとし、障害のある人となない人の間の相互理解・交流等を造形的表現で訴えるものとする。

なお、応募は、未発表のもの一点に限るものとし、作品中に標語それに類する文字は入れないものとする。

② 募集の区分

小学生区分及び中学生区分の二区分とする。

③ 規格、画材、作成方法等

ア. 規格は、画用紙B3判(横三六四mm×縦五一五mm)又はいわゆる四つ切り(横三八二mm×縦五四二mm)を使用し、これに満たない作

品は、B3判の台紙に貼付する。なお、作品は縦位置（縦長）のみとする。
イ. 彩色画材は、自由とする。

ウ. 第三者が知的財産権を保有する著作物を使用しないこと。

④ 応募者の属性等に関する資料（属性表）

作者の属性表（様式）の項目に従い、氏名、住所、年齢（生年月日）、性別、所属先（学校名・学年又は職業）、電話番号、FAX番号、障害の有無・程度、作品の題名（タイトル）及びその他参考となる事項等を記載し、作品と共に提出する。

⑤ 応募先

富山県身体障害者団体協議会

〒九三〇〇〇九四 富山市安住町五二二 TEL〇七六―四四四―〇二二三

⑥ 募集期間

令和二年七月一日（水）から九月一日（火）までとする（当日消印有効）。

8. 選定

応募された作品については、審査のうえ、各区分ごとにそれぞれ最優秀賞、優秀賞を九月末までに決定し、入選者に通知する。最優秀賞作品は、富山県代表として内閣府へ推薦する。

9. 表彰

富山県で表彰式を行い、最優秀賞受賞者及び優秀賞受賞者にそれぞれ賞状及び副賞（二万円相当、五千円相当）を贈る。また、応募者全員に参加賞を贈る。

10. 個人情報

応募者に関する参考資料に記入した個人情報はこの募集の連絡や参加賞送付のみに使用する。ただし、入賞者の個人情報は内閣府への推薦や作品集、ホームページの掲載に使用する。応募者は、あらかじめこの旨同意のうえで応募するものとする。

11. その他

作品は原則として返却しない。ただし作品の返却を希望するときは、応募時に申し出ること。

令和2年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」応募状況

1 「心の輪を広げる体験作文」応募状況

	計
小学生	3 編
中学生	34 編
高校生	89 編
一般	0 編
合計	126 編

2 「障害者週間のポスター」応募状況

	計
小学生	1 点
中学生	22 点
合計	23 点

令和二年度

「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」審査会審査員名簿

浜谷 尚生	元水橋郷土史料館長
島崎 俊哉	富山県有美術品管理事務員
水井 勤	富山県社会福祉協議会地域福祉部地域福祉・ボランティア振興課長
布尾 英二	富山県身体障害者団体協議会会長
平野 幹夫	富山県手をつなぐ育成会常務理事
青山 正二	富山県精神保健福祉家族連合会理事長
霜鳥 裕一郎	富山県厚生部健康課副主幹・精神保健福祉係長
青山 徹	富山県教育委員会県立学校課特別支援教育班指導主事
辻井 秀幸	富山県厚生部障害福祉課長

心の輪を広げる体験作文・
障害者週間のポスター入賞作品集

― 出会い、ふれあい、心の輪 ―

令和二年十一月発行

発行 富山県厚生部障害福祉課

印刷 富山生きる場センター